

世紀末デカダンスの香り： オスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』考（1）

森 和憲*

Smell of Decadence at Fin de Siecle: A Study of Oscar Wilde's The Picture of Dorian Gray (1)

Kazunori MORI

Synopsis

The purpose of this study is to investigate how olfactory descriptions emerge and how they co-relate with the narrative in Oscar Wilde's (1854-1900) *The Picture of Dorian Gray* (1891).

In this paper, we will look at chapters from the first to seventh. In the first section, we concern ourselves with the first to third chapters of the novel and to investigate how floral fragrances are compared to the innocence and beauty of Dorian Gray before he is influenced by the New Hedonism of Lord Henry Wotton.

In the second section, we concern ourselves with the fourth to seventh chapters of the novel and raise the question, from the point of view of smell, as to why Dorian abandons Sibyl Vane. We analyze the smell around those characters and conclude the divergence of smell between the two that is supposed to be the determiner of their divorce.

1. 序

「におい」という感覚の一要素は文学研究において比較的軽視されてきたように思える。実際、文学とにおいを主題に捉えた研究書は少なく、たとえあっても、その大部分がにおいという現象に対する広範囲な学問の一部としての文学研究であって、それはあくまでにおいを社会的に調べるために歴史資料として用いられているに過ぎない。しかし、においの文学的研究がこのような段階にあまじっているのには、においという感覚の性質上、避けられない三つの理由があるからである。一つは、においを気にすることは、自分の体に関心を持つことを意味し、したがってキリスト教社会においては、これを強く戒めていた歴史があるということ。二つ目は Rindisbacher (1992) ¹⁾の指摘のように、とりわけ視覚や聴覚の方が、情報の伝達や浸透をさせる機能にあたって有利な立場にあり、どちらかといえばにおいはこの点に関して不利であったがゆえに文化的な側面から疎んじられる傾向があったということ。そし

て三つ目は、文学におけるにおいの最大の問題であろうが、においは瞬間的な感覚であり、かつ無形骸であるがゆえに言語でもって言い表しがたいという点だ。それは匂いに対する形容詞を見ればよくわかる。においに対する形容詞といえばふつう「よい」かまたは「くさい」かのどちらかであって、それ以外の語でにおいを表現することは難しい。たとえば人はあるにおいを指して、「これはリンゴの匂いだ」ということはできるが、「これは赤いにおいだ」ということはできない。つまりにおい自体はそれそのものをあらわす形容詞を持たず、何か別の感覚からに対する形容詞を借用するか、もしくは名詞や動詞に「～のような」をつけて形容詞化し、それによって、においの性質をあらわすしかない。

このように歴史的、文化的そして言語的に不利な立場にたたされたにおいという感覚ではあったが、Oscar Wilde (1854-1900)の『ドリアン・グレイの肖像』におけるにおいを研究するにあたって、このことは必ずしも当てはまらないと筆者は考える。というのもこの作品においてワイルドは多くの香りを用いており、その数は彼のほかの作品と比べてみても一目

*一般教科

瞭然であるからだ。たとえば「におい」を表す代表的な単語 *scent, smell, aroma, odour, perfume, fragrance, stench, stink, malodor* について、彼の主要な作品においてその数を調べてみると、大まかに見た場合、演劇では 15 箇所、童話を含む短・中篇物語では 9 箇所であった。一方、『ドリアン・グレイの肖像』の場合は長編一作品中にこれらの語が 28 箇所もあり、ほかの作品における数を大幅に上回っていた。このことからわかるように、香りというのはこの小説においては構成要素と無視してはならない存在である。

そこで、筆者はこの『ドリアン・グレイの肖像』におけるにおいをこと細かく分析し、それを分類することで、当作品におけるにおいの役割と、それを支える彼の思想を明らかにしていきたいと考える。

当論文では、『ドリアン・グレイの肖像』第 1 章から第 7 章までを取り上げ、香りの表現と、作家の思想の関係を検証する。

2. 無垢の香り(小説第 1 章から第 3 章)

小説『ドリアン・グレイの肖像』は香りで幕をあける。

The studio was filled with the rich odour of roses, and when the light summer wind stirred amidst the trees of the garden, there came through the open door the heavy scent of the lilac, or the more delicate perfume of the pink-flowering thorn. From the corner of the divan of Persian saddle-bags on which he was lying, smoking, as was his custom, innumerable cigarettes, Lord Henry Wotton could just catch the gleam of the honey-sweet and honey-coloured blossoms of a laburnum, whose tremulous branches seemed hardly able to bear the burden of a beauty so flamelike as theirs; ... The sullen murmur of the bees shouldering their way through the long unmown grass, or circling with monotonous insistence round the dusty gilt horns of the straggling woodbine, seemed to make the stillness more oppressive. The dim roar of London was like the bourdon note of a distant organ. (*Works*^{註1}:18)

場面は画家ホールワードのアトリエ。画家とヘンリー卿の二人は、美しい青年が描かれた肖像画について話をしている。そこにはバラ、リラ、サンザシ、キングサリ、といったさまざまな色と匂いの花があり、それが二人を取り巻いているのである。このよ

うに花の描写とその香りから始まるドリアン・グレイの肖像であるが、この冒頭部分はこれから作品を分析していく上で特に重要であると筆者は考える。なぜなら、冒頭からしてすでにワイルドはこの作品の物語を成立させる重要な場を築き上げているように思われるからだ。その場というのが、この作品が書かれた時代と一致する、19 世紀末 (*Fin de Siècle*) という場である。

Fin de Siècle とは文字通り訳せば世紀の終わりを意味するが、ふつうこの言葉は 19 世紀末をとくに指す言葉として用いられるのが常である。なぜ 19 世紀末なのか。

19 世紀末という時代はヨーロッパの歴史を考える上でつねに重要な部分を占めている時代である。なぜなら、社会的に見れば、19 世紀以降、権力構造が貴族支配から、ブルジョワ階級による支配へと変化していったが、それが決定的になりつつあった時代であり、また経済学的にも産業革命が一段落し、その功罪が目に見えて顕れ始めた時代であった。また文化的な面では、それまでの貴族文化は滅び行く運命となり、それにとって代わってブルジョワの世俗的な文化が栄えるようになった。このような特異な時代にあつて、ワイルドはほかの世紀末作家の先頭に立ち、芸術至上主義を掲げ、ブルジョワの低俗さを徹底的に糾弾していったのである。そして彼のこの姿勢は先に上げた冒頭部分にもしっかりと読み取ることができる。たとえばここに登場する花を見てもらいたい。これらの花はそこに自生している花ではなく、すべて人の手が加えられた切花である。つまりこのアトリエは自然ではなく、人工の空間なのである。この人工性はワイルドの美学にとって、なくてはならない存在であるのは *The Decay of Lying* (1889) の “Life imitates Art far more than Art imitates Life” (*Works*: 1091) という一節を見ればはつきりするだろう。

さらにそこに漂う香りの描写を見てみると、それは豊潤で、重厚で、繊細とあるが、わざわざつけられたこれらの形容詞にワイルドのこだわりが感じられはしないだろうか。序論でも述べたように香りに対する形容詞というのは少ないはずである。しかし、ワイルドは考える限りの、かつ文化的に飽和状態にあつた世紀末を暗示させるような形容詞をここで用いているのである。そして香りという嗅覚を用いることにより、このアトリエは、単に視覚的な花の色彩による平面的 2 次元世界にとどまらず、奥行きをもった空間的 3 次元の世界として成立することが

できるのではないだろうか。山田 (1981)²⁾ が指摘しているように、この『ドリアン・グレイの肖像』は劇的資質を備えていると筆者も考えるが、この冒頭部分は、その劇空間を成立させるためのワイルドの場面指定のようなものとして考えられる。

そしてこの冒頭の香りについてもう一つ指摘しておきたいことがある。それはヘンリー卿の吸う煙草の煙である。これは後の記述にもあるように、阿片入りの煙草で、当然そこからの立ち上る煙には煙草独特の香りとともに、阿片の香りも感じられるはずである。このような退廃的な匂いは、前述した花の濃厚な匂いとあいまざり、アトリエの空気を高密度化し、アトリエの世紀末的雰囲気をも極限状態にまで押し上げる。そのような雰囲気の中でバジルとヘンリー卿の二人はドリアンの肖像画とその美しさについていろいろと話をするのであるが、この雰囲気こそが第2章で登場するドリアン自身の美とその魅力を期待させる伏線にはなっていないだろうか。

以上に、このアトリエの持つ独特な雰囲気を述べてきたが、さらにここでもう一つ言及しておきたいことがある。それはこのアトリエがほかの現実社会とはまったく切り離された場所として捕らえられていることである。それが如実に顕れるのはミツバチの羽音の存在である。ここでは、遠くに響く重低音のようにしか聞こえてこないロンドンの喧騒とは対照的に、本来聞こえにくいはずのミツバチの羽音のはっきりと聞こえている。つまり、これは俗物のはびこるロンドンからいかにこのアトリエが切り離された静寂しき空間であるかを決定づけるものであるということではないだろうか。しかもミツバチの羽音は聴覚的なものであるが、嗅覚的にもこの距離感には必然的に生じていると筆者は考える。このアトリエの空気の濃厚さは、その空間の気密性を意味しているものであるが、逆にいえばそれ以外の空間の空気の希薄性を物語るものではないだろうか。そしてこの俗世間と美的空間の断絶装置としての役割を担う香りは、ある意味、審美主義という一つの教義を清める香りとして、宗教上の清めの香りに似てはいないだろうか。

そもそも香りというものは元来キリスト教社会にはあまり縁のない感覚であった。なぜなら香りに関心を持つことは肉体に関心を持つことを意味することであり、したがって厳しく規制されたのである。しかしその一方で香りを扱うことを許された身分があった。聖職者である。彼らは儀式の時、清めのために香や香油を用いたが、それは俗世間と聖なるも

のを分ける意味で用いたのである。ちょうどマグダラのマリアがキリストの足を香油でぬぐったように。そして小説の導入部においても、このような香りのもつ浄化作用を利用して、バジルのアトリエを俗世間と切り離し、ドリアンの登場とその後の物語にふさわしい美的空間をワイルドは築き上げたと考えられる。審美主義の使徒として、小説にふさわしい舞台を清めるために、これら濃厚な香りが用いられたのだ。

さて、この切り離された空間を満たす濃厚な空気はいわばこのアトリエの雰囲気全体がこれから登場するドリアンの美の象徴として捉えられるべきものなのであるということがこれまで述べてきたが、では実際にドリアンが登場した時、彼を包む香りはいかなるものであったのか。この点に関して第2章で画家が肖像画を仕上げている場面の描写を見てみたい。

Lord Henry flung himself into a large wicker arm-chair and watched him. The sweep and dash of the brush on the canvas made the only sound that broke the stillness, except when, now and then, Hallward stepped back to look at his work from a distance. In the slanting beams that streamed through the open doorway the dust danced and was golden. The heavy scent of the roses seemed to brood over everything. (*Works.* : 32)

ここでは直接ドリアンについては語られてはいない。しかし、部屋に舞うチリの色は、暗に見事な金髪をした、精気あふれる若々しいドリアンの姿を語るものである。そして匂いもバラの香りがあたり一面に「たちこめる」という記述からわかるように、前述の空気の気密さがいっそう増したことがうかがえる。

さて、ここで一つ考えておきたいことがある。それはこの時期におけるドリアンと香りの関係を考えてみると、すべてドリアンは花の香りと結びつけられるということである。次の引用を見て欲しい。

Lord Henry went out to the garden and found Dorian Gray burying his face in the great cool lilac-blossoms, feverishly drinking in their perfume as if it had been wine. He came close to him and put his hand upon his shoulder. "You are quite right to do that," he murmured. "Nothing can cure the soul but the senses, just as nothing can cure the senses but the

soul." (*Works.*: 30)

これも第2章からの引用で、ドリアンがモデルになるのに疲れたとあって、休憩をとる場面であるが、ここで筆者が問題にしたいのは彼の何気ない仕草である。彼は疲れを癒すために、まるでワインを飲むように香りを胸いっぱい吸いこんでいるが、なぜドリアンは疲れを感じ、それを癒すための手段として花の香りを用いたのであろうか。

第2章において、ドリアンはヘンリー卿と出会い、彼と会話を交わすことで審美主義、デカダンス、ダンディズムといったヘンリー卿の思想の洗礼を受けることになるが、それは純粋無垢で若いドリアンにとっては重過ぎる思想ばかりであった。なぜなら彼は純粋無垢であったがゆえに、ヘンリー卿の刺激の強い考えに戸惑いを感じているのである。しかしだからといってドリアンにそれらが全く理解できなかったというわけでもなく、逆に本質的にドリアンがそれらに迎合できる能力があったからこそ、これらの思想は徐々にドリアンの中で身を結びつつあったのである。したがって彼の感じる疲れはある意味、思想の「受胎」によるものであって、このように香りを吸うことでその受胎からくる「つわり」を軽くしようとするドリアンは理解できよう。ではなぜ、その香りがなぜ花の匂いなのか。

これまで私が引用してきた文章をもう一度分析してみると、最初の引用ではバラ、リラ、キングサリの香りが用いられ、次の引用でも同じくバラであった。そしてここではライラックの花が用いられている。ここから考えられるのは、ドリアンは若さあふれる美を象徴するには花が一番適当であったということだ。それは後に詳しく述べることになるが第11章でデカダンとしてのドリアンがクライマックスに達したとき、彼の関心が色彩では宝石、匂いに関しては完璧なる人工物である香水にある点と比較すれば、この時点での純粋なドリアンは花として喩えられるのも理解できよう。ヘンリー卿の思想がドリアンの中で胎動をはじめようとも、まだ肖像画の完成を目の当たりにしていないドリアンは、この時点においては、ヴィクトリア朝的モラル面でも、肉体的にも一点の傷の無い、青年というよりもむしろ少年と呼ぶ方がふさわしい人物であった。そしてその姿は色とりどりの花を咲かせ、あたり一面にその芳香を漂わせている花々そのものであったともいえる。したがって、ヘンリー卿の思想の刺激の強さや、その胎動からくる自己の変化に対する戸

惑いをかき消すには、やはり華やかで精気に満ち足りた、かつ自然とも人工ともつきがたい花の香りが一番ふさわしいのではないだろうか。

さて、匂いという感覚を小説において注目する上で、先の引用で見逃してはならないのはヘンリー卿の言葉である。「感覚以外に魂を癒すものは何もない。ちょうど魂以外に感覚を癒すものは何もないのと同じようにね。」と彼は言うが、この言葉はこのときドリアンの中に深く刻み込まれ、そして最後までドリアンに付きまとうこととなる。現に、後に彼が阿片を渴望して阿片窟へ馬車を急がす場面があるが、その馬車の中で、彼はこの言葉を反芻している。この点については特にテーマと深く関係があるので、後にさらに深く分析したいのだが、現時点でいえることは、ヘンリー卿は感覚を魂と同レベルで扱うことにより、aestheticismが彼の思想でも重要な位置にあることをドリアンに伝えようとしていることがわかる。なぜなら aestheticismにとって「感覚」はその語源、「感覚によって認識できるもの」を見ればわかるように^{註2}、核をなすものであるからだ。そしてこの教義を吸収しつつあったドリアンにとって、この時魂を癒す感覚とは匂いであり、そしてそれは自身に一番ふさわしい花の香りであったのだ。

しかしいざれにせよ、ドリアンは花である以上、いつかその花卉は朽ち果て、香りもしなくなる。実際、ヘンリー卿は彼を花にたとえ、“Time is jealous of you, and was against your lilies and your rose.” (*Works.*: 31) と警告している。そしてこの警告と、自分の若さを永遠化した肖像画を目の当たりにすることによって、ドリアンはこの後年老いていく自分を嘆き、その悲しみの余り彼はあの呪いの言葉を肖像画に向かってぶつけるのである。この呪いはドリアンは運命を狂わすものとなるが、これと同時に、彼から香る匂いについても少しずつ変化が見られるようになる。そして彼が退廃の道を深く進めば進むほど、その変化はいっそう顕著なものになる。次項からはその変化について考えていきたい。

さて、次項に移る前に物語の前半でヘンリー卿とドリアンとの関係について述べておきたい。第3章においてヘンリー卿はドリアンは出生の秘密を知り、ますます彼に対して興味を抱くようになる。その肩入れは目に余るほどで、たとえばアガサ夫人の宅で二人が同席したときには、傍若無人で見詰め合うこともあった。そしてこのような二人の関係は、ドリアンとバジルの関係と同様、どこかホモセクシャルな関係を匂わせ、それが多くの批評家の注目すると

ころとなっているが、この観点から Shinfield (1994)³⁾ や Behrendt (1991)⁴⁾ など近年多くの批評家が作者ワイルド本人のホモセクシュアリティを考えることに成功している。筆者はこれらの考え方には同意するが、ここではそれらの視点を考慮に入れずに、これまでどおり香りという感覚の観点から、ヘンリー卿とドリアンとの関係、それにヘンリー卿とワイルドの関係についてもここで述べておきたい。それを考える上でヘンリー卿の次の言葉は注目に値する。

...There was something terribly enthralling in the exercise of influence. No other activity was like it. To project one's soul into some gracious form, and let it tarry there for a moment... to convey one's temperament into another as though it were a subtle fluid or a strange perfume; there was a real joy in that...(Works.:39-40)

ヘンリー卿が、これからドリアンに対していかなる影響を与えていこうかと、思いをめぐらせている場面からの引用である。ここからわかるように、ヘンリー卿にとっては魂というものは必ずしもその人物固有のものではなく、入れ替えが可能なものであった。いわば、魂と肉体の間には任意の関係が成立しているのである。そしてそのような関係が成り立っているからこそ、繊細な液体や、奇妙な香気のように人の気質というのも乗り移っていくというのである。注目すべきはこの「繊細な液体や、奇妙な香気のように」という部分で、ここからもわかるように、ヘンリー卿は漂う香りのようなものとして人の気質、引いて言えば魂を捉えており、逆にいえば審美主義にとって重要な要素である香りのような気質であるからこそ、人の肉体を動かす魂としての資格が生まれるのだとヘンリー卿は考えているのだと解釈できる。

そして筆者には、この考え方はヘンリー卿のものだけにとどまらず、それを描くワイルドの中にも確固としてあったものだと思えてならない。なぜなら 1891 年出版の *The Fisherman and his Soul* はこの考えにのっとって物語世界は構築されているのであり、またワイルド自身の登場人物の解釈を考慮に入れると、このヘンリー卿のドリアンに対する憧れと、ワイルドのドリアンに対する憧れはほぼ共通項でくくるといえるからだ。とすればヘンリー卿のこの香りに関する記述もワイルド自身の言葉として受け取ってもあながち間違いではなからう。すなわち、こ

の前述の劇空間の中で登場人物を動かすにあたって、ワイルドはヘンリー卿が考えていたような 'perfume' を利用することを念頭においていたのではないかと考えられる。

3. 下層階級の臭い(小説第4章から第7章)

ドリアンの変化がはっきりとした事実となって読者に提示されるのは、ドリアンがシビルに対して恋愛感情を抱くときが最初であろう。結論から言えばこの恋愛感情は演技するシビルという虚像に抱いていたものであり、その意味でシビル本人にとって、これは実態を持たない恋愛感情であった。そのことに気づいたドリアンは彼女を捨て、その結果シビルは自殺してしまうわけであるが、この出来事はドリアンがヘンリー卿の影響でダンディズムに開眼し、ヴィクトリア朝的モラルの墮落と退廃の道を歩み始める決定的な事実となったもので、小説の構造上非常に大きな意味を持っている。

簡単に説明してしまうとそうなるが、では実際に二人の関係はいかなるもので、何故にそれが壊れ、シビルの死を招かなければならなかったのだったのであろうか、筆者はシビルとドリアンとの匂いの相違に注目し、以下でこの問題について取り組んでいきたい。

シビルを取り巻く匂いについての直接の記述は、先に述べたドリアン記述の数に比べると皆無に等しい。しかし、彼女の住んでいる地区や彼女が演技している場末の劇場の描写に注目すれば、おのずとその匂いははっきりとしてくる。ドリアンは "...a wild desire to know everything about life." (Works.: 47) と町を行き交う人々に対する好奇心に駆られ、ロンドンの東の方へ足を運ぶが、そこは周知のとおり、貧困地区であった。そこで繰り広げられる人生模様というのが多種多様で、ドリアンにとって新鮮で、すこぶる興味深いものだったので、彼は心をうっとりさせられたり、嫌悪感にさいなまれたりしたが、それがいつそう彼の好奇心を煽り立てた。このような風景描写がドリアン自身の口から語られるのだが、残念ながらここではその雑踏の匂いははっきりとは言及されていない。しかし "there was an exquisite poison in the air" (Works.:47) とはほめかされている。では、この 'an exquisite poison' とはどのようなものだったのであろうか。この点に関してはメイフュー (1992)⁵⁾ の記述を援用したい。彼の『路地裏のロンドン』はヴィクトリア時代のロンドンの民衆の生活と風俗を丹念に纏め上げたものだが、そこに見られる

ビルングズゲイトの市場の描写を引用する。

「ロンドン大火の記念塔までいくと、ずらりと並んでいる呼売商人の列が見え、魚屋の背の高い荷車が、二台まじって、統一を乱している。遠くの市場の騒々しい声と音が、蜂の巣から聞こえる羽音さながらに、耳を襲い始める。(中略) 朝の空気は、海辺を思わせるような海草のような匂いに満ちている。市場の中に入ると、魚、貝、薫製ニシン、スプラットイワシなど様々のものの匂いが強烈に鼻をつく。」(メイヒュー:66)

これら市場における生魚のニオイは、なにもビルングズゲイトに限った事ではなく、そこで仕入れた魚を路上で小売りしていたのであるから、街のいたるところでこの臭いがしていたらと推測できる。そしてそれは好意的にみれば良い匂いになるかもしれないが、しかし普段から調理した魚しか見ていないであろうドリアンにとって、この魚の生臭さは、不快な部類の臭いになるだろう。

またロンドンには「拾い屋」なる職業が存在していたが、彼らの仕事はゴミ収集や川あさりだけではなく、骨や犬糞なども収集していたようだ。骨があるということは腐乱した死骸があるということの意味しており、したがってそれが発する臭いも容易に想像できよう。

これらロンドンの、特に東側の地区に漂っていたはずの悪臭は、しかし人生を知り尽くそうとするドリアンにとっては、よりいっそう好奇心を煽るものであり、その意味で‘an exquisite poison’であったのだ。自分の肉体と人生を芸術の領域まで高めるには、世の中の正と負の両面を知らなければならなかった。その為にはこの種の毒が必要不可欠であったのである。

そしてそのようなドリアンが最後に行きついたのが怪物のようなユダヤ人が経営する小さな芝居小屋であった。この芝居小屋の雰囲気もまたドリアンによって語られているが、そこは「三流のウェディング・ケーキのようなみずぼらしい内装」が施され、「二階とその下の席に陣取る観客はすさまじい勢いで胡桃を食べている」という、当時人気の娯楽であった1ペニー劇場の模様をしのぼせる場所であった^{注3}。劇場のにおいについてはコルバン(1990)⁶⁾が示すように^{注4)}、このような低級な劇場は悪臭の巣窟で、当時入浴する習慣が一般的でなかったため、特にそ

こに集う人間の体臭はすさまじいものであったという。

実際、この小説の中でも、そのにおいては、ワイルドが間接的な表現を用いて示唆している場面がある。それは第7章においてドリアンがバジルとヘンリー卿を伴って劇場に足を運んだときの劇場の様子を描写している部分であるが、演劇が始まる前の民衆で一杯になった平土間の雰囲気指して、“The heat was terribly oppressive.”(Works.: 68)と表現しているところにある。これはもちろん当日の出し物に期待して集まった人たちの興奮と熱狂を表しているものであろうが、それと同時に、そこにある気体、つまり悪臭の強烈さも表現したものであろう。そしてこのような雰囲気の中で演技するからこそシビルの美しさも一際映えわたるものになったのだ。

しかし、このような悪臭にばかり目を向けても、彼女には場末の劇場や雑踏に漂う香りがふさわしいとここで言いきるのは時期尚早である。なぜなら、この小説におけるシビルはドリアンと知り合う前と後では、全くの別人のようであるからだ。したがって、彼女の香りを見るときには事前、事後のそれぞれのシビルに漂う香りを見ていかなければならない。

シビル・ペインは『ドリアン・グレイの肖像』4章から7章までの中心人物であるが、彼女はドリアンと恋におちることで、人生が180度変わってしまった女性として描かれている。

ドリアンが彼女に対して求婚したときがその転換点であるが、求婚前は、彼女は“a girl...with a little flower-like face...lips that were like the petals of a rose.”(Works.: 49)と花のように喩えられさえしているし、その美しさはドリアンをして目に涙をあふれさすほどであった。この時の、場末の劇所でいっそう際立つ彼女の美しさは、花に喩えられて当然であり、その意味でこの時の彼女から漂う香りは、先のドリアンと同じく花の芳香であったということもできよう。しかし、忘れてならないのが、このドリアンの賞賛は生身のシビルに向けられたものではなく、女優としてシェイクスピアの登場人物を演じていたシビル・ペインにこの賞賛と恋心は向けられていたことである。したがって、花の香りが似つかわしいといっても、それは彼女の肉体からみれば虚像であるシビルに似つかわしいのであって、シビル自身の肉体に似つかわしいのでない。つまりシビルにとって、花の香りは虚像に相応しく、実像には相応しくないのである。

しかし、それまでとは逆に、ドリアンから婚約を

言い渡されたとき、彼女は演技することを止めてしまった。この時点で、彼女の虚像と実像が入れ替わり、彼女自身が実像となり、演技する方が虚像となったのである。そのため彼女は急速に実世界の人間となり虚像に相応しかつた花の匂いはシビル・ベインから奪われ、先に述べたようなロンドンの雑踏において彼女にとってふさわしいにおいとなるのである。

この論点を補強するために、シビルと弟のジム・ベインがハイド・パークへ散歩に出かけた時の公園の花壇の描写を引用する。

They took their seats amidst a crowd of watchers. The tulip-beds across the road flamed like throbbing rings of fire. A white dust, tremulous cloud of forrisroot it seemed, hung in the panting air. The brightly coloured parasols danced and dipped like monstrous butterflies. (*Works.*: 60)

当時ハイド・パークを散歩するというのは上中流以上の階級の楽しみであった。そこへ体の大きい船乗りという一見して労働者階級とわかるジムと、容姿は端麗ではあるが、しかし下町の芝居小屋の女優という、やはり低い身分のシビルがハイド・パークへ繰り出し、ベンチに腰を下ろすというのは当時の常識からは相当外れていたにちがいない。実際、ジムはハイド・パークへ行くと聞いた時、「自分はみすばらしい」とためらっているし、彼らが公園で腰をおろすと、回りの紳士・淑女連中は蔑むようにじろじろと二人を見ている。

そして注目したいのは、ここに咲いている、燃えるように鮮やかなチューリップや、花粉とともにその芳香を漂わしているようなニオイショウブである。これらは、一見ドリアンとの婚約を交わしたシビルを祝福しているように見え、また、遠いオーストラリアへ船出するジムの門出に「文字通り」花を添えているようにさえ見えるかもしれない。しかし、そうであったとしても、それらは道路の向こう側にあり、かつそれは周囲の蔑むような目と婦人たちがさす「大きな」日傘という目に見えない壁によって、二人のところまでその香りは届かない。結局先に述べたように、花の香りはドリアンの美や、もしくは、演技するシビルの虚像の美を象徴するのにふさわしいもので、現実味を帯びてしまったシビル家にとってこの香りは無縁のものであるのだ。

さらに、ドリアンとシビルの香りの境界を表すも

う一つの例をあげたい。ドリアンはシビルに失望し別れを告げた後、我を忘れてシビルの芝居小屋を飛び出し、無意識のうちに町をさまよったのだが、彼が正気を取り戻したのは劇場から南へ遠く下ったコヴェント・ガーデンであった。この時、特に印象的なのが、その空気が“The air was heavy with the perfume of the flower.” (*Works.*: 73) と記述されているところにある。コヴェント・ガーデンは青果と花卉の市場として有名であるが、そこに集まる荷車から漂う花の香りは彼の正気を取り戻すには一番ふさわしい香りである。なぜなら本論第1章ですでに説明してきたこの時点でのドリアンを取り巻く香りは花の香りに集約していたからだ。しかもワイルドが、アトリエと同じくここでもにおいの過剰を意味する‘heavy’を形容詞として付加していることを私たちは見逃してはならない。つまりワイルドは香りの類似と差異を利用して、ドリアンの本来のテリトリーとシビルのテリトリーに、はっきりとした境界線を引いていることがわかる。これは先ほどから私が述べてきた、ワイルドの香りの利用を証明する好例ではないだろうか。

さて、ここまでシビルを中心に小説4章から7章における香りの表現とそこに起こる事象との関連性を眺めてきたが、ほかの登場人物を取り巻くにおいについてはどうであろうか。ヘンリー卿やバジルを取り巻くにおいについて、小説のこの部分においてはなにも表現されていない。しかし、においとは少しずれるかもしれないが、花に関して取り上げたい箇所が一ヶ所あるので、引用してみたい。

"Pleasure is the only thing worth having a theory about," he answered in his slow melodious voice. "But I am afraid I cannot claim my theory as my own. It belongs to Nature, not to me. Pleasure is Nature's test, her sign of approval. When we are happy, we are always good, but when we are good, we are not always happy."

"Ah! but what do you mean by good?" cried Basil Hallward.

"Yes," echoed Dorian, leaning back in his chair and looking at Lord Henry over the heavy clusters of purple-lipped irises that stood in the centre of the table, "what do you mean by good, Harry?"

"To be good is to be in harmony with one's self," he replied, touching the thin stem of his glass with his pale, fine-pointed fingers. (*Works.*: 66)

場面はシビルの芝居小屋へ繰り出す前に、ドリアン、ヘンリー卿、バジルが夕食をともにしているところである。ドリアンが女優と婚約したことを聞いて、ヘンリー卿とバジルは最初非常に驚いたようであった。とくにバジルはヘンリー卿からそれを聞かされて、「ドリアンはそんな真似をする人間ではない。」と、とにかく信じたくない様子であり、さらに“*It is some silly infatuation.*” (*Works.*: 63)というように、彼には全く賛成する意思がないようだった。しかし、直接ドリアンの口からシビルがいかにも、繊細で、美しいか、そしてどれほど夢中になっているかを聞かされて、躊躇しながらも当初の疑いは彼から消えていった。実際、演技に失敗したシビルを目の当たりにしたとき、彼は“*My dear Dorian, I should think Miss Vane was ill...*” (*Works.*: 70)とシビルに対して気遣う態度を見せている。

一方ヘンリー卿はドリアンの婚約に対して、賛成とも反対とも断言せず、いつもと変わらず逆説を多用してドリアンを惑わすような発言を繰り返す。もともとヘンリー卿はこの二人の恋愛をロマンスの始まりとして考えて、それは自分に目覚めたドリアンが、これから経験していくであろう数々のロマンスの第一回目として捉えていた。そしてドリアンが婚約の話を持ち出したときもそれを信用せず、ただ、芸術としての人生を追い求めるドリアンの一通過点に過ぎないと考えていたのである。したがって、ヘンリー卿は、ダンディとしてのシニシズムと審美主義者のダイアログをもって、心躍らすドリアンを論そうとしたのである。

そのような3人の間で交わされる対話の一場面が上の引用であるが、ここで注目したいのはアイリスの花である。ドリアンはこのアイリス越しにヘンリー卿を見つめているのだが、この何気ない動作の中にもある象徴性が感じられる。というのも、この花越しに見つめられるヘンリー卿の態度や言葉は逆説に満ち、その真意はつかみ所の無いものであるが、そのつかみ所の無さはそのアイリスの語源である「虹」にたどることができると考えられるからだ。ドリアンがこの世に「存在」するのではなく「生きる」ようにさせたのは、バジルの描いたドリアンの肖像と、ヘンリー卿の言葉であった。このとき以来、彼は生を探求し、その結果シビルという女性を発見し、恋に落ちたのだが、今問題になっている婚約も、元をたどればその原因はヘンリー卿にも責任があるはずだ。しかしヘンリー卿は先のようなシニシズムを

持ってドリアンは突き放している。この時、ドリアンにしてみればヘンリー卿の言葉は理解に苦しむものとなるだろう。このシニシズムはしかし、ドリアンを否定するものではなく、むしろ彼を引き込むような効果をもっているため、ドリアンもそのような戸惑いゆれながら、よりいっそうヘンリー卿のパラドックスの中に入り込むのである。特にそれは、ドリアンが“*Harry, you are dreadful! I don't know why I like you so much.*” (*Works.*: 70)とヘンリー卿に向かって言う台詞に顕れているだろう。このような心理にあるドリアンの視線は、机の中央に置かれたアイリスというフィルター、語源的に言えば虹のフィルターを通すことで、ようやくヘンリー卿の姿と言葉を直視できるのである。さらに語源的に突き詰めれば、アイリスには神の使者という花言葉もあることから、この花を通して語られるヘンリー卿の言葉には、ダンディやデカダン、エピキュリアンの神の使いの言葉という意味合いも帯びてくるだろう。そしてその言葉を受け取るのは、今やヘンリー卿の使徒の一人となったドリアンである。

このように考えると、アイリスはヘンリー卿の象徴として捉えられるべきもので、その意味では、先のシビルとドリアンを取り巻くにおいと同様に、ここでもワイルドは、厳密に言えばにおいではないが、それを推測させる花という小道具を用いて人物を造形することに成功しているといえる。

3. まとめ

さて、本論ではドリアン・グレイの肖像第1章から第3章まで、および小説の第4章から7章までについて述べてきたのだが、ここまでの論点をまとめてみたい。

まず、第1章から第3章までにおいて、ワイルドは世紀末的な重さのある香りを持ちいて小説世界を構築していった。そしてその世界は香りや音の感覚作用によって劇場的三次元の空間となり、かつその空間は、ワイルドの美学から見ればそこに漂う香りによって浄化された聖なる人工楽園であることが読み取れる。そこには周囲のロンドンの雑踏は忍び寄る影も無い。そしてそこに登場するドリアンは、その美しさを花を象徴にして表される人物であり、その花の匂いがこの時点でのドリアンの健全さを意味している。しかし、その一方でヘンリー卿というダンディが登場する。彼は煙草の煙に象徴されるような世紀末の匂いを漂わす人物であるが、その彼の啓示によってドリアンは自分の美とその宿命に気づき、

退廃の道を徐々に歩むことになる。これらの人物には常に過剰なほどの香りが取り巻いているが、ワイルドがヘンリー卿の体を借りて、口にしてるように、その過剰はワイルドが人物の造形において香りの作用に気がついていたことに由来すると考えられる。したがって、これ以降の彼らを取り巻く香りを見ることによって、彼らの内面がこの小説においてどのように変化していったのかを捉えることができるだろう。

次に小説の第 4 章から 7 章であるが、第一に、この中心舞台である、シビルの生活領域であったロンドンの貧困地区や劇場は、ドリアンの生活領域とは対照的に、悪臭の漂う場所であった。この悪臭は空間的に先ほどのアトリエとの間に空間的相違を決定的に提示するものである。第二に、シビルには実像と、虚像が存在しているが、シェイクスピアの登場人物というシビルの虚像こそがドリアンにとって重要で、それには周囲の環境とは対照的に花の香りが相応しかつた。しかし、ドリアンに恋することで、シビルは実体を持ってしまい、現実に戻され、彼女から漂う香りは周囲の悪臭と同化するにいたつた。このドリアンの芳香とシビルの悪臭は、双方の文化的コードの違いという、決定的な相違を表すものである。そしてこの両者にある深い溝を埋める手立ては無かつたので二人の破局は確実なものとなつた。第三にヘンリー卿とドリアンの関係であるが、これはアイリスの花を象徴として描かれている。ヘンリー卿の逆説とシニシズムはドリアンを惑わせ、そのあまりにも捉えどころの無い台詞は、アイリスの語源である虹を思い起こさせる。またヘンリー卿の言葉は、ヴィクトリア朝的道德観からドリアンが抜け出す手助けとなっているが、ダンディズムやデカダンティズムを一つの宗教として定義すれば、彼はある意味その神の使徒的な存在である。そしてその存在は、神の使者の言葉という花言葉をもつアイリスに象徴されている。

以上のように、香りと花のコードは芳香と悪臭という二項対立的な図式でここまでは成り立ってきた。しかし、シビルの死以降、肖像画の変化が変化したように、これ以降ドリアンの香りも徐々に変化していく。次論では再びドリアンの香りに注目し、その変化と小説中の出来事との係わり合いを論じていきたい。

- (1) オスカー・ワイルド作品の引用はすべて *Complete Works of Oscar Wilde*. London: Harper Collins Publishers. (1994)による。以下 Works.とのみ記す
- (2) *The New Shorter Oxford Dictionary* (1993) によれば、*aesthetic* の語源については [Gk *aisthetikos*, f. *aistheta* things perceptible by the senses]とある
- (3) “...It was a tawdry affair, all Cupids and comucopias, like a third-rate wedding cake. The gallery and pit were fairly full, (中略)Women went about with oranges and ginger-beer, and there was a terrible consumption of nuts going on.” (*Works.*: 48)
- (4) 「悪臭をばらまく人間の密集場はほかにもある。(中略) 実は劇場もそうなのである。劇場で人々の苦情を集めていたのはボックス席で、神経の繊細な女性を有毒ガスにさらすといって非難された。」(コルバン:68)

参考文献

- (1) Rindisbacher, Hans J. (1992) *The smell of books : a cultural-historical study of olfactory perception in literature*. Ann Arbor: University of Michigan Press
- (2) 山田 勝 (1981) 『世紀末とダンディズム: オスカー・ワイルド研究』、大阪: 創元社
- (3) Shinfield, Alan. (1994) *The Wilde Century: effeminacy, Oscar Wilde, and the queer moment*. New York: Columbia University Press.
- (4) Behrendt, Patricia F. (1991) *Oscar Wilde: Eros and Aesthetics*. Basingstoke: Macmillan.
- (5) ヘンリー・メイヒュー、ジョン・キャニング編、(1992) 『ロンドン路地裏の生活誌・上』、植松靖夫訳、東京: 原書房
- (6) アラン・コルバン (1990) 『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』、山田登世子・鹿島茂訳、東京: 藤原書店

注